

## いのちを ささえる うたと ことば トークリサイタル

講師 新垣 勉

2014年10月5日(日) なら100年会館 大ホール

台風18号の接近が心配されるなか、自ら「晴れ男」と自慢する新垣勉さんの言葉通りほとんど雨もなく、なら100年会館には1,300名ものお客様が来場され「いのちを ささえる うたと ことば トークリサイタル」が開催されました。

主催:公益財団法人 住友生命健康財団  
後援:奈良県・奈良市・奈良県教育委員会・奈良市教育委員会・  
一般社団法人奈良県視覚障害者福祉協会  
住友生命保険相互会社 奈良支社

第1部では障害や数々の逆境を乗り越え、プロテノール歌手として大成された新垣さんを支え、救ってきた「出会いとことば」が新垣さんの半生に沿って紹介されました。

全盲のハンディキャップ、両親の離散により恵まれない境遇にあったとはいえ、少年時代の新垣さんは「成績はいつも行進曲=イチニツ、イチニツ」というご本人の言葉とは裏腹に、盲学校の先輩や先生の「アドバイスのことば」を素直に受け入れ実行することにより、音楽はもとより、英語など様々な方面で才能を伸ばしていきました。

しかし14歳、新垣さんを養育していた祖母が脳梗塞で倒れ、入院することもかなわず3か月後に帰らぬ人となってしまいます。それだけでも大変なショックですが、これをきっかけに今まで大人たちが隠していた真実、失明の原因が助産婦による過失であったこと、母と思い込んでいた人が実は祖母であったことなどを知り、天涯孤独の境遇と相まって新垣さんは自殺未遂を図るほどの絶望に追いやられます。

そんな新垣さんを救ったのはある牧師との「出会い」でした。「自分の父は米兵で日本人の母が私を生んだのにアメリカに帰ってしまった。大人になったら父を探し出して殺してやりたいほど憎い。」との思いをぶつけますが、牧師は慰めの言葉さえなく、ただすすり泣く声が聞こえるだけでした。その時新垣さんは「ことばを超えて相手のために相手のことをわかろうとする、そんな心もあるのだなあ。」と感動し、生きることをもう一度考えようという気持ちになりました。

その後新垣さんは神学を学び牧師としての活動と聖歌隊での活動、つまり歌を歌いながらの伝道活動を続けることにより「歌手・新垣勉」としての面も徐々に有名になり、ついにはプロ歌手となりました。

新垣さんは常に人との「出会いとことば」によって才能を伸ばすことができた、と言われます。日本では外国に比べ「自信」を持たない子供が多い、その原因は日本人は人を褒めることが苦手だからだそうです。競争で人と比べる「自信」は時として「過信」になったり「自信喪失」になりますが「自分の存在そのもの=自分には自分にしかないいいところがある、というゆるぎないオンリーワンの価値」を褒めて育ててあげることが大事、と言われます。そして「生きる」とはその「オンリーワンの自分を自分らしく表現し続けること」と締めくくりました。

第2部では新垣さんの「ことば」である様々な歌をご披露いただきました。特にアンコール「さとうきび畑」の平和への願いを込めた響きに、会場は深い感動に包まれました。

